

無からの詩学—ツェランとハイデガー

「倫理的なもの／政治的なもの」

2019年9月29日（日）同志社大学

報告 國重裕（龍谷大学・教養教育ドイツ語教員）

knjiga.biz.ryukoku.ac.jp

La poésie ne s'impose plus ; elle s'expose. 26.3.69¹

龍谷大学の国重です。本日は研究発表の機会を与えていただき、光栄です。わたしはもともと文学研究者ですので、ツェラン研究の視座からハイデガーを論じることになります。ツェランがハイデガーから多くを学んだことはまちがいありません。今から具体的に多くのテキストを引用し、ツェランがハイデガーから摂取したこと、ツェラン独自に展開した思想を、紹介してまいりますので、たくさんのご意見、ご批判をいただければ幸いです。（ハイデガーがツェランをどう読んだかは、きわめて資料が乏しいため触れられません）²

目次

はじめに ツェランとハイデガーの出会い	……1
1 ハイデガーを読むツェラン—「ブレーメン講演」（1958）と「子午線」（1960）	……2
2 ツェランの詩学とハイデガーの哲学—ハイデガー『芸術作品の根源』との比較	……5
3 「無」からの根拠づけ—シエストフ『ゲッセマネの夜』	……7
3 ツェラン「闇」（1957）「讃歌」（1960）	……11
おわりに ハイデガーとツェラン 通底する倫理性と政治性	……16

はじめに

チェルノヴィッツに生まれたパウル・ツェラン（1920-70）がハイデガーの哲学に出会ったのは、ブクレシュチからヴィーンに逃れてきた1948年、当時ヴィーン大学の哲学科で学位論文『マルティン・ハイ

¹ 万年筆で手書きされたメモ。»L'Ephémère« 誌14, Paris 1970, p. 184 掲載。(GW3-181/WHK16-397)

ツェランのテキストからの以下を用い、略号GWおよび巻数、頁数を数字で記す。

Paul Celan: *Gesammelte Werke*. Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main, 1986.

Paul Celan: *Werke. Historisch-Kritische Ausgabe. (Bonner Aufgabe) 1, Abteilung. Lyrik und Prosa.* Band 15-1&2, Band 16. Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main, 2014, 2017. 略号 WHK

Paul Celan: *Der Meridian. Endfassung-Entwürfe-Materialien. Thübinger Ausgabe.* Hrsg. von Jürgen Werthheimer. Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main, 1999. 略号 Th-A

ハイデガーのテキストからの引用は略号GAおよび巻数、頁数を数字で記す。

Martin Heidegger: *Gesamtausgabe*, Vittorio Klostermann Verlag, Frankfurt am Main, 1975 ~ .

² vgl. Di Cesare, Donatella: Überstzen aus dem Schweigen. Celan für Heidegger. in: Heidegger und die Literatur. hrsg. von Figal, Günter und Raulff, Ulrich, Vittorio Klostermann, 2012, S. 17-34.

デガールの実存哲学の批判的受容』を執筆中のインゲボルク・バッハマンと知り合ったときである。しかしツェランがハイデガールの著作を本格的に読み始めたのはパリに移住した1952年以降であることが、蔵書の書き込みから確認されている。France-Lanord、Lyonによる2冊のモノグラフは、ツェランの蔵書のハイデガールの著作にある下線や書き込みから、ツェランがハイデガールをどのように受容していったかを丹念に分析した労作である。

しかし文献学的に貴重な2冊の研究書は、やむをえないこととはいえ、ハイデガールの哲学がツェランの詩学そして詩作にどのような影響を与えたのか、俯瞰的に考察する視座には乏しい。そこで本発表では、ツェランがハイデガールの思索のどこに惹かれ、詩人としてみずからの関心に即してどのように摂取したのかを、ツェランの詩論「ブレーメン文学賞受賞講演」(1958)、「子午線——ビューヒナー賞受賞講演」(1960)、そして同時期に書かれたいくつかの詩から考察する。

本日解釈を試みる「闇」「誰でもない者の薔薇」の原文と拙訳は、巻末に掲載する。

1. ハイデガールを読むツェラン——「ブレーメン講演」と「子午線」

ツェランが入手し、購入したハイデガールの著作のリストは資料につけた。Lyonによると、1954年に『思惟とは何か Was heißt Denken?』を読んでいた頃から、欄外の書き込みや読書ノートには、ハイデガールの引用やそのコメントだけでなく、自身の詩学の覚え書きが増えていくという。このことから、ハイデガール哲学に触発されて、自分の詩学を構想しはじめたと考えてよい。しかし、だからといって、ツェランがハイデガールの思想をそのまま受け入れたと即断はできない。ツェランの解釈がハイデガール哲学の理解として適切かも検証されるべきだろう。本日の発表では「テュービンゲン版」「ボン版」2つのツェランの批判校訂版で、一般読者も目にすることができるようになったツェランのメモから詩学の形成プロセスを考察する。

ハイデガールの専門家が集った今日のフォーラムでは、まずツェランが公の場で発表した詩論の概要を紹介し、ツェラン詩学の「完成形・到達形」を示す。それを念頭におきながら、テキスト形成過程を追う順で、話を進めよう。——その際、はじめからツェランは一冊の詩学をまとめる心積もりでノートをとりはじめたわけではないこと、「ブレーメン文学賞受賞講演」(1958)、「子午線——ビューヒナー賞受賞講演」(1960)という2つの端緒をきっかけに、ツェランは受賞講演にふさわしく、これらのメモ群から一つの詩論を編み上げていったことを、あらかじめ念を押しておきたい。

「ブレーメン講演」では、みずからの出生の地、ハプスブルク帝国時代、東方の文化的中心都市であり、ユダヤ系文化人が多数を占めていたチェルノヴィッツから、ナチス・ドイツの蛮行を経て、自分が今いるブレーメンまでの距離について、語られる。その上でツェランはつぎのように言明する、数知れぬ闇をくぐり抜け、ことばだけが失われずに残った、と。「このことば(ドイツ語)によってみずからを方向付け、自分がどこにいるのか、どこに向かおうとしているのかを知るため、自分を投企するために詩を書いてきた」とツェランは言い切る。

詩はその本質からして対話的であるというツェランは、詩は、現実には傷つき、現実を求めながら、開けたところに立ち、所有することができ、語りかけうる『あなた』、語りかけうる『現実』を求めて書かれるのだとする(この中で、有名な『投壘通信 Flaschenpost』の比喩)が用いられる。

Sie, die Sprache, blieb unverloren, ja, trotz allem. (---) In dieser Sprache habe ich, in jenen Jahren und in den Jahren nachher, Geschichte zu schreiben versucht: um zu schreiben, um mich zu orientieren, um zu erkunden, wo ich mich befand und wohin es mit mir wollte, um mir Wirklichkeit zu entwerfen.

Es war, Sie sehen es, Ereignis, Bewegung, Unterwegssein, es war der Versuch, Richtung zu gewinnen.

Das Gedicht kann, da es ja eine Erscheinungsform der Sprache und damit seinem Wesen nach dialogisch sein (...). Auf Offenstehendes, Besetzbares, auf ein ansprechbares Du vielleicht, auf eine ansprechbare Wirklichkeit. ³

ツェランの言葉づかいから、すでにハイデガーの影響を感じとることは容易だろう。ここでは、ホロコーストを経て「ことば」だけが残った、そのことばによって、現実を投企するために詩を書く、というツェランの決意だけを確認し、つづけてビューヒナー賞受賞講演「子午線」を読んでみよう。

西ドイツを代表する文学賞「ビューヒナー賞」受賞を知らされたツェランは、1960年10月の授賞式にむけて、受賞講演を書き始める。「子午線 Der Meridian」といわれる彼の唯一まとまった詩論である。ビューヒナー賞講演では、ゲオルク・ビューヒナーの作品に触れながらみずからの文学観を語るものが慣習であったため、ツェランもビューヒナーからの引用を行っている。ビューヒナーの戯曲『ダンTONの死』や短篇『レンツ』に言寄せて、ツェランは自分の詩学を語るのだ。本日はハイデガー・フォーラムであるため、乱暴ではあるが、全体の論旨を損なわないよう、ビューヒナーにかかわるところは割愛し、あえてハイデガーとの関連性が高いところを中心に引用し、「子午線」を要約していく。⁴

最初に問題とされるのは、詩 *Dichtung* と芸術 *Kunst* の違いである。自然を、その姿そのままに定着したいという欲望を、ツェランはメデューサに喩える。しかし、そのように石になった芸術作品は、操り人形、自動式機械 *automat* のようなものである、と否定する。ほんとうの芸術は、対象を固定したり、普遍性を目ざすべきものではないからである。ここで念頭におかれているのは、マラルメであり、ベンが主導する「絶対詩」の概念である。ツェランが考える芸術（彼はとりあえず《詩 *Dichtung*》という語と対置する）は、一回きりの *einmalig* 存在、贈られたもの *Schicksal* だからだ。このような「詩作」はどのような条件のもとで生まれてくるのか。「芸術は、自己忘却、自己を遠ざけるものである。詩作や芸術は、自己忘却した『わたし』、あの不気味な『場』に赴くことではないだろうか。」この見知らぬ場で、ひとは自らを他者のような「わたし」として自由に解放できる、とツェランはいう。

Wer Kunst vor Augen und im Sinn hat, (---) der ist selbstvergessen. Kunst schafft Ich-Ferne. (---)

³ Ansprache anlässlich der Entgegennahme des Literaturpreises der Freien Hansestadt Bremen. (GW3-185f) 草稿にも“Gedichte sind Daseinsentwürfe: man muß Ihnen, um ihrer Wahrheit willen, nachleben. (Th.A. S.120)

⁴ Der Meridian. Rede anlässlich der Verleihung des Georg-Büchner-Preis Darmstadt, am 22. Oktober 1960.GW3, WHK15-1.ビューヒナーその他のドイツ語文学も含めた「子午線」論は、四日谷敬子の著書『ハイデッガーの思惟と芸術』参照。

Vielleicht –ich frage nur –, vielleicht geht die Dichtung, wie der Kunst, mit einem selbstvergessenen Ich zu jenem Unheimlichem Ort? doch womit? doch als was? –wieder frei? (GW3-193)

(--)

Finden wir jetzt vielleicht den Ort, wo das Fremde war, den Ort, wo die Person sich freizusetzen vermochte, als ein –befremdetes –Ich? (GW3-195)

現代詩が難解だと批判されることを受け、ツェランはシェストフによるパスカル論を引用しながら、こう述べる「自己投企し、遠さとよそよそしさをたたえる《暗さ Dunkelheit》ゆえに、詩とは出会いなのではないだろうか」と（下線は引用者による）。パスカルについては、後ほど触れることにして、先を急ぐ。

Meine Damen und Herrn, es ist heute gang und gäbe, der Dichtung ihre „Dunkelheit“ vorzuwerfen. (--) Erlauben Sie mir, hier ein Wort von Pascal zu zitieren, ein Wort, das ich vor einiger Zeit bei Leo Schestow gelesen habe: „Ne nous reprochez pas le manque de clarte puisque nous en faisons profession!“ –Das ist, glaube ich, wenn nicht kongrenitale, so doch wohl die der Dichtung um einer Begegnung willen aus einer –vielleicht selbstentworfenen – Ferne oder Fremde zugeordnete Dunkelheit. (GW3-195)

詩は途上にあり、孤独である Das Gedicht ist einsam. Es ist einsam und unterwegs というハイデガーの「ことばの途上で」を思わせる文言をはさみながら、「ブレーメン講演」とおなじく「詩は対話になるのです、それも、しばしば絶望的な対話に」と、ツェランは詩の本質を闡明する⁵。この対話の空間において語られる者が形成され、そして語りかけそして名づけうる「わたし」のまわりに集まってくるのだ。詩が探し求めるのは、このような出会いが可能になる「どこにもない場 U-Topie」である、とツェランは結論づける。

Das Gedicht wird –unter welchen Bedingungen! –zum Gedicht eines –immer noch – Wahrnehmenden, dem Erscheinenden Zugewandten, dieses Erscheinende Befragenden und Ansprechenden; es wird Gespräch –oft ist es verzweifelt Gespräch.

Erst im Raum dieses Gesprächs konstituiert sich das Angesprochene, versammelt es sich um das es ansprechende und nennende Ich. Aber in diese Gegenwart bringt das Angesprochene und durch Nennung gleichsam zum Du gewordene auch sein Anderssein mit. Noch im hier und jetzt des einmalige, punktuelle Gegenwart –, noch in dieser Unmittelbarkeit und Nähe läßt es das ihm, dem Anderen, Eigenste mitsprechen: dessen Zeit.

Wir sind, wenn wir so mit den Dingen sprechen, immer auch bei der Frage nach ihrem Woher und Wohin: bei einer „offenbleibenden“, „zu keinem Ende kommenden“, ins Offene und Leere

⁵ Der Adressat des Gedichts ist niemand. Niemand ist da, wenn das Gedicht zum Gedicht wird. Das Schicksal dieses Niemand auf sich nehmen, führt zum Gedicht. WHK16-249

und Freie weisenden Frage –wir sind weit draußen.

Das Gedicht sucht, gaube ich, auch diesen Ort. (GW3-198f.)

2. ツェランの詩学とハイデガーの哲学—類似点と相似点

概観しただけでも、両者のあいだには親近性とともにも違いも浮かびあがってくる。

今日は深く踏みこむ余裕がないが、「ことば」を故郷 *Heimat* とするツェラン（1954年の紙片には「詩人の故郷はその時々にかかれた詩作である」ということばが認められる⁶⁾）と、大地 *Erde*, *Boden* にこだわるハイデガー、あるいはドイツ民族の文化的共同体、土地を想定するハイデガーとは、相容れないだろう⁷⁾。「Der Tempelwerk eröffnet dastehend eine Welt und stellt diese zugleich zurück auf die Erde, die dagestalt selbst erst als der heimatliche Grund herauskommt. (GW5-28)」

(ちなみに「ドイツ大学の自己主張」について、1949年の学位論文でバツハマンが使用文献の一冊として銘記している。ハイデガー生誕70年を祝う祝賀論集に寄稿を求められたバツハマンとツェランは、この申し出を断る。1959年の往復書簡をひもとけば、バツハマンもツェランもこの総長講演に触れており、二人ともハイデガーの政治性に自覚的であったことがわかる。1959年8月5日付けツェラン宛バツハマン書簡「Ich habe doch vor Jahren eine kritische Heidegger-Arbeit geschrieben (...) habe ich doch meine Einstellung Heidegger gegenüber nie geändert, seine politische Verfehlung bleibt für mich indiskutabel, ich sehe auch, nach wie vor, die Einbruchsstelle dafür in seinem Denken, in seinem Werk (...)」1959年8月10日付けバツハマン宛ツェラン返信「Ich bin, Du weisst, sicherlich der letzte, der über die Freiburger Rektoratsrede und einiges andere hinwegsehen kann; aber sage mir auch (...)」けれども、ふたりが寄稿しなかったのは出版社への不信感が原因だった。——したがって1950年代のツェランは、ハイデガーの行動を知りつつ、そしてみずからのユダヤ性についてもノートに多くの書き込みを残していたにもかかわらず、ホロコーストの問題を「ブレーメン講演」でも「子午線」でも、ほとんど捨象していることが、際だってみえる。)

今日注目したいのは、詩人の「わたし」の位置づけにある。『芸術作品の根源』のなかで、ハイデガーはつぎのように述べる。

Das Kunstwerk eröffnet auf seine Weise das Sein des Seienden. Im Werk geschieht diese Eröffnung, d.h. das Entbergen, d.h. die Wahrheit des Seienden. Im Kunstwerk hat sich die Wahrheit des Seienden ins Werk gesetzt. (GW5-25)

⁶⁾ WHK16-471.

⁷⁾ ハイデガーのナチスへの加担、そしてみずからの言動に関して戦後も反省の言を公にしなかったことが、当然のことながらハイデガーとツェランの関係においても問題にされる。ツェランがユダヤ人であり、両親を強制収容所で失っており、戦後もなお根強くはびこる反ユダヤ主義に敏感であった以上、当然である。前述の先行研究のうち、France-Lanordは両者の出会いは友好的であったとする一方、Lyonはハイデガーから謝罪の言葉が聞かれなかったことにツェランは深く失望したとする。「倫理的なもの/政治的なもの」という今回のフォーラムの主旨からも、聴衆の関心の中心はこの主題にあるのかもしれない。けれども2人が実際に邂逅した際に何が語りあわれたかは、オットー・ペゲラーらの伝聞情報でしか分からず、2人の研究者も証拠となる資料をあげながらまったく正反対の結論にいたっているのだ。憶測を積み重ねぬため、今回は60年代のツェランとハイデガーについては言及しない。

Im Dastehen des Tempels geschieht die Wahrheit. Dies meint nicht, hier werde etwas richtig dargestellt und wiedergegeben, sondern das Seiende im Ganzen wird in die Unverborgenheit gebraucht und in ihr gehalten. (GW5-42f.)

芸術作品に果たす詩人（芸術家）の役割は、積極的には論じられていない。詩人はことばの護り手 *die Bewahrenden* とだけ述べられにとどまる。ハイデガーにとって、重要なのは真理の開示であり、存在であったからだろう。それに対し、ツェランは芸術作品に、「わたし」が現実を獲得する場をみてとる。

また *Dichtung* は運命的で、一回きりとする点も共通している（＝ツェランがハイデガーから継承している）⁸。「ブレーメン講演」の中でも、詩は生起である、と述べられる。Es war Ereignis, Bewegung, Unterwegssein (GW3-186)。対して『芸術作品の根源』の一節。

Das Ereignis seines Geschaffenseins zittert im Werk nicht einfach nach, sondern das Ereignishafte, daß das Werk als dieses Werk ist, wirft das Werk vor sich her und hat es ständig um sich geworfen. (GW5-53)

作品が生起であるという発想は、ツェランがハイデガーから学び取ったものに違いあるまい⁹。現実こそ所与のものではなく、ことばによってその度ごとに投企される。¹⁰

つぎのような草稿の覚え書きもわかりやすい例だろう。

Denn jedes Gedicht erhebt notwendig den Anspruch auf Einmaligkeit, Unwiederholbarkeit, in jedem Gedicht wird der Wirklichkeit ein für allemal Schach geboten, ist die ganze Wirklichkeit auf eine Handbereit Bodens zusammengedrängt, und in dieser Bedrängnis, die nicht nur eine räumliche sondern auch eine zeitliche ist, wird ihr die Chance zuteil, sich im Gegenüber mit dem dichterischen Wort (in dem wiederum die ganze Sprache, d.h. die Sprache als Möglichkeit und Fragwürdigkeit zugleich) zu behaupten. (1954.11.18) WHK16-489

⁸ *Dichtung* –das ist das schicksalhaft Einmalige der Sprache. (---) („Antwort auf eine Umfrage der Librairie Flinker, Paris (1961) GW3-175) 詩作も翻訳も、複数可能な事態ではないのだ。また「子午線」と同時期に書かれたハンス・ベンダー宛書簡にも、Gedichte, das sind auch Geschenke –Geschenke an die Aufmerksamen. Schicksal mitführende Geschenke. とある。„Brief an Hans Bender“ Paris, den 18. Mai 1960. (GW3-177f.)

⁹ Freilich ist hier niemals die Sprache selbst, die Sprache schlechthin am Werk, sondern immer nur ein unter dem besonderen Neigungswinkel seiner Existenz sprechendes Ich, dem es um Kontur und Orientierung geht. Wirklichkeit nicht, wirklichkeit will gesucht und gewonnen sein.⁹

¹⁰ Dichten als Geschehen. Geschehen=Wahrheit („Unverborgenheit“ erwirkte, erstrittene Unverborgenheit (sic) / *Dichtung* als Wagnis Schöpfung= Gewalt-tätigkeit (Heidegger) WHK16-482. 1954年9月とおぼしき書き込み。「子午線」草稿ノートの中にも参照。vgl. Das Gedicht wartet (=steht offen) auf sein abwesendes –kommendes und damit künftiges –Du. WHK16-242.

ユダヤ人として受けた苦痛は、一回性で単独のものであるにもかかわらず、ことばによって普遍化された「苦痛」になりかねないジレンマも、ツェランが生起ということばを使った理由だろう。

現存在 Dasein について議論するハイデガーと、詩作の現場の「叙情的自我 das lyrische Ich」を意識しているツェランでは「わたし」の捉え方が根本的に変わってくる。Die Sprache spricht と述べるハイデガーと、das Gedicht spricht(GW3-196)というツェラン。Dichtung は他者 Gegenüber, Du との出会いを求める途上にあり¹¹、対話的 dialogisch, Gespräch である。その際詩人は脱自的であり自由である、と考えるツェラン¹²。これはハイデガーが『存在と時間』で述べた Ruf とは異質な見方である。(ちなみに蔵書の書き込みを見れば、ツェランが読んだ形跡がのこっているのは、『存在と時間』第二部のうち、§47~53 および、第2章 §57. Das Gewissen als Ruf der Sorge, §58. Anrufvestehen und Schuld だけである。) (ハイデガーとツェランにおける「呼びかけ」の違いを「橋渡し」するために、ブルトマンの神学を参照したことがある。)

3. 「無」からの根拠づけ—シエストフ『ゲッセマネの夜』

ツェランのノートは「Die kongenitale Dunkelheit des Gedichts (詩と暗さ (=難解さ) が不可分であること)」と題されていたことが知られている。そこで、テュービンゲン版全集から、“Dunkelheit“がツェランにとってどのように用いられたか検証しよう。日付が残っているいちばん古い記述である。8月18日のメモはない。

1959年8月17日

Vorstellung und Erfahrung, Erfahrung und Vorstellung lassen mich, in Ansehung der Dunkelheit des Gedichts heute, an eine Dunkelheit des Gedichts als Gedichts denken, an eine konstitutive, kongeniale Dunkelheit also. Mit anderen Worten: das Gedicht kommt dunkel zur Welt; es kommt, als Ergebnis radikaler Individuation, als ein Stück Sprache zur Welt, somit d.h. sofern Sprache Welt zu sein vermag, mit Welt befrachtet.¹³

...

Pascal: Ne nous reprochez pas l'obscurité, puisque nous en faisons profession. ¹⁴

1959年8月19日

Das Gedicht hat, wie der Mensch, keinen zureichenden Grund. Daher seine spezifische Dunkelheit, die in Kauf genommen werden muß, wenn das Gedicht als Gedicht verstanden

¹¹ Das Gedicht ist, fürchte ich, die Phase totaler Du-Finsternis getreten: es spricht in fremdester Sache. WHK16-250. フロイトの関連では WHK16-233 参照。Das Gedicht als Vor-Kommnis. / „Die Schrift ist ursprüngl. die Sprache des Abwesenden“ = im Gedicht wird ein abwesendes nahe, tritt es an dich (einen noch Abwesenderen) heran.“

¹² „Es gibt (→) Ekstasen. Weltgewinn, Wirklichkeitsgewinn, und damit meine ich nicht etwa ein Resultat, sondern eine Richtung –das bedeutet im Gedicht gleich-zeitig auch dies: Hinaustreten aus der Kontigenz.“ Th.A. 126 あるいは „das Gedicht als Ekstase> Weltgewinn als Weltverlust; Entwerden (1960年5月18日) Th.A. 130.

¹³ Th.Ausgabe 84.

¹⁴ a.a.O. 90. これがパスカルの原典からではなく、シエストフからの重引であることは、“Pascal: Ne nous reprochez pas l'obscurité / Schestow: Gethemane“ (Th. A. S.92) というメモで、ツェランのうろ覚えがあることからうかがえる。正確な原文は、後に挙げる。

sein soll. Vielleicht auch: das Gedicht hat seinen Grund in sich selbst; mit diesem Grund ruht es (s. oben) im Grundlosen.¹⁵

Das Gedicht: ein Sichrealisieren der Sprache durch radikale Individuation, d.h. einmaliges, unwiederholbares Sprechen eines Einzelnen.¹⁶

つまり、ビューヒナー賞受賞が通知される 1 年近く以前から、ツェランのハイデガーの読解は、シェストフのパスカル論や、現代詩の難解さについての考察と並行して進んでいたことがわかる。そして受賞講演当日 1960 年 10 月 20 日直前の日付があるメモにも、上記のパスカルのことばが繰り返し書きとめられていることから¹⁷、「子午線」には欠かせないモチーフだったことが知れる。

さて Dunkelheit という語がどのように意味づけられていたのだろうか。一義的には「暗さ、闇」である。(二重線は原文、波線は引用者による)

Das befremdende Dunkle, der Dichtung kommt daher: aus der Richtung, in der es sich (bewegt.) –das Entfremdete um her durchgehend, auf ein Fremdestes zubewegt. (---) Hier mag nun, in diesem Zusammenhang, d.h. unvermittelt, ein Wort von Pascal stehen, das ich noch unvermittelbar, nach Schestow zitiere: Ne nous reprochez pas l'obscurité, Das ist, wenn auch nicht das kongenitale, so doch das zugeborgene Dunkel des Gedichts.¹⁸

1960 年 6 月 1 日

Das Gegenwort zu „scheinbar“ ist nicht, wie man zunächst denken möchte, „real“ oder „sinnfällig“; es im „Unscheinbaren“, nicht Erscheinenden, nicht zu Tage Tretenden zu suchen; es ist das Verborgene, das erwacht, wenn es unser Auge offen und unterwegs und dadurch auch nahe weiß. Ne nous reprochez pas l'obscurité, das ist ein Wort von Pascal¹⁹

Pascal –Abgrund // Aug-in-Aug mit nichts²⁰

Das Abgründe (ist tatsächlich) das Bodenlose → Abgrund – Pascal²¹

シェストフのパスカル論『ゲッセマネの夜』は、自身もキリストの苦悩に到達できるまでは、決して眠るまいと決心した人間パスカルの世界観を描いている。アリストテレスや近世の西洋哲学が頼みとす

¹⁵ Th.A. 88f. なお同じような内容のメモとして Das Gedicht hat seinen Grund in sich selbst; mit diesem Grund ruht es, wie der Mensch, im Grundlosen.がある。op.cit. またこの日のメモにはフロイト『快楽原理の彼岸』に関する覚え書きもある。a.a.O. S. 100.

¹⁶ a.a.O. S. 117.

¹⁷ a.a.O. 90. 1960 年 5 月 17 日

¹⁸ a.a.O. S.86. vgl. S. 87f.

¹⁹ a.a.O. S.92.

²⁰ a.a.O. S.91.

²¹ WHK16-253. = Th.A. S. 92.

る理性も、いわんやローマ教会の決定も根拠にならぬ。もちろん、神が創られたものを、理性で人間が認識できるはずもない。こう見做すパスカル。ふつうの人がしっかりとした大地 **Erde** を足元に望み、見ようとならない深淵 **Abgrund** に、パスカルは向き合ったのだ²²。このパスカルが見出した信念こそ、ツェランが繰り返し引用した件の科白なのである。「理性なるものが僭称するものすべてを信じないと決め、光に満ちた地を去ったのだ。なぜなら光は虚偽を明るみに出すから……**Qu'on ne nous reproche pas le manque de clarté, car nous en faisons profession**²³」

ツェランが読んだシエストフのドイツ語訳を引用しよう（下線、引用者）。

Jetzt wird man nur jene als richtig Suchenden erkennen können, die «cherchent en gémissant». Dann es ist auch der Abgrund, den Pascal nicht loswerden konnte, und seine wahnsinnige Angst vor diesem Abgrund erwünscht er als fester Boden unter den Füßen und Geistesruhe. Nur das Entsetzen, das ein Mensch empfindet, wenn er merkt, daß er keinen festen Boden mehr unter den Füßen hat, und daß er in einen bodenlosen Abgrund versinkt, vermag ihn zu dem „wahnsinnigen“ Entschluß zu bringen, das „Gesetz“ abzulehnen und im Widerspruch gegen alle anerkannten Wahrheiten zu handeln. Darum spricht Pascal in seinen „Pansées“ so viel von den entsetzlichen Bedingungen unseres irdischen Daseins. ²⁴

ハイデガーが「形而上学とは何か」、「根拠の本質について」において、無について、そして根拠 **Grund** / 深淵 **Abgrund** について加えた考察については、本日ご参加のみなさまはよくご承知のことだと思う。

Sein und Nichts gehören zusammen, (...) weil das Sein selbst im Wesen endlich ist und sich nur in der Transzendenz des in Nichts hinausgehaltenen Dasein offenbart. (GW9-120)

ハイデガーとツェランの詩学上の大きな隔たりにもかかわらず、通底していたものとは何か。出自も歩んだ人生も異なる詩人と哲学者は、詩学においてある線においては明確に対決しながら、なおなぜ惹かれあつたのか。

理屈を語るより、ツェランの詩を読んでみよう²⁵。「闇」、「讃歌」の二篇とも、今日みえてきた詩論形成の時期に書かれたツェランの代表作である。

4. ツェラン「闇」、「讃歌」

神、主イエス、人間。ツェランの詩「闇」はこの三者の関係をうたったものである。詩のなかで、「神にして人間」という形姿の象徴としてイエス=キリスト、さらに詩人が喚び出される。詩のタイトル「闇

²² a.a.O. S. 58f.

²³ a.a.O. S. 89. 翻訳の後記で、引用箇所を Ruoff はつぎのようにドイツ語訳している。„Man werfe uns nicht Mangel an Klarheit vor, denn wir machen sie uns zum Beruf.“ a.a. O. S. 107.

²⁴ a.a.O. S.99f.

²⁵ 二つの詩の詳細な解釈は、平野嘉彦『ツェラーンもしくは狂気の花』、相原勝『ツェランの詩を読みほどく』を参照。

Tenebrae」は、イエスが磔刑に処せられたとき、日蝕が起り、地上は闇に閉ざされた故事にちなむ。

ツェランのこの詩では、みずからを主イエスに重ねあわせる態度が見てとれる。神のことばを人間に伝えうる特権的存在であると同時に、神への応答する生身の人間でもある詩人。しかしこの詩で、神と相対しているのは「わたしたち」であり、救済を願ってわたしたちが主に祈るのではなく、主に対し「祈りなさい」と命令する。

この詩に描かれているのは強制収容所の光景であろう。わたしたちは磔刑に処せられたイエスさながら血を流している。「眼と口が大きく開いてうつろなまま」であるということは、虐殺された死者であるとも考えられる。

神が姿を隠している時代、「神の蝕 Gottesfinternis」には、詩人がイエスのように人間の罪を担う役割も果たすべきだとツェランが考えていた可能性もあるだろう。ここでの「わたし」（この作品では「わたしたち」だが）が、ツェランの詩人像を体現しているといえるのではないか。この論難の場で、一瞬出現して消えていく「現実」。このような詩作を、entbergend Verbergen(GA54-89)しつつ、自己覆蔵をまもる身振り解釈することは、ハイデガーの哲学からすれば行き過ぎだろうか。この詩に描かれた光景は、鑑賞の対象として「事物」であってはならない。たえず生成する「現実」たるべきなのだ。

つづいて「讃歌」を読もう。

ツェランの「讃歌」も、両義的であり、逆説的ではある。第一連は、「讃歌 Psalm」と題されているにもかかわらず、「闇」同様、神を難じているようにみえる。この世で起きたユダヤ人虐殺を神が黙視したことへの怒りが背景にあることは推測できる。にもかかわらず、第二連では一転して、「讃えよう」と、文字どおり「讃歌」へと調子が変わるのである。それだけではない。つとに指摘されてきたように、ドイツ語の *niemand* という語はもともと「だれも~ない」という否定辞の代名詞である。しかしこの詩で「*niemand*」は、「だれでもないもの」と、あたかも実在の存在であるかのようにも読めるのである。もしそう理解するなら、「だれでもないもの」という得体のしれない対象であれ、詩の最初から一貫して頼るべき「だれか」は存在していることになる。それならば、第一連と第二連のあいだの突然の転調は理解できる。

けれども第一連では小文字で登場してきた *niemand* が、第二連になって *Niemand* と大文字の存在へと変わるのとはなぜか。そもそも「だれでもない者」とは何者なのか。不可知の神なのか。「だれでもない」以上やはり虚像にすぎないのか。全能の神を前にして、人間は盲目的に神を讃えるしかないのか。

第四連の「紅い花冠」「棘」は、磔刑に処せられる救世主イエスを連想させる語彙だ。ひとびとを救済するためのイエスの受難（紫はイエスが着せられたマントの色）、つまり受苦と救済を同時に喚起する。初期の傑作「死のフーガ」の詩句「黒い牛乳」に端的に示されているとおり、具体的なものと抽象的なものを属格によって接合したり、火と雪、重さと軽さといった対蹠的なものを併置するなど撞着語法 *Oxymoron* を多用することで、ツェランは生と死者といった対極的な領域にひろがる絶対的な断絶と、その深淵に架橋を試みる営為の難しさと矛盾を表現してきた。

「だれでもないものの薔薇」で苦難を背負っているのは、「闇」と同様、イエスではなく「わたしたち」である。この「わたしたち」は平野嘉彦らが指摘するとおり、灰になってしまった「死者たち」だろう。ツェランの「詩篇」は、神による救済はいまだ訪れず、むしろ不当な暴力にさらされた「わたしたち」を放置する神を詠る内容の作品だともいえる。神に抗議しながら、神を讃美する。しかも、この詩の神

は、万物の創造主たる神ではもはやなく、わたしたちを捏ね上げることすらできない「だれでもないもの」でしかない。

また第二連、「讃えよう、だれでもないあなたを」という表明は、話者と切り離されていた「過去」が、話者にリアルな「現在」に変容する瞬間でもある。主語や述語を欠いた宙づりの文の第四連全体は、第三連の「だれでもないものの薔薇」を修飾している。そしてこの「だれでもないものの薔薇」は、「無」であるところの「わたしたち」を指す。waren wir、 sind wir、 werden wir bleiben、 blühend は、連辞動詞 sein の過去形、現在形、未来形の併置で、かつ「blühend 花咲きながら」は現在分詞だ。つまりこの詩「だれでもないものの薔薇」は、「もはやない」と「いまだない」の「間」の時間、過去から未来を横断する「場 U-Topie」を表現しているといえる。だから、神からの「わたしたち」に救済の時空が顕現することを待望している。この開かれの「場」と、ハイデガーが『芸術作品の根源』で述べる芸術観は近い。

神は人間にとって語りうる存在である必要はない。神は人間の願望の投影ではない。そもそも有限な人間に無限な神を感知するすべはない。それゆえ不可知な「汝」は「だれでもない者」と呼びかけられなければならないのだ。

姿を見せる／隠す神。人間でありキリスト（詩人）。その呼びかけのうちに開示される詩という「場」。これらの詩に、ツェランなりに骨肉のものとしたハイデガーの哲学の、詩作の実践例を看とすることはできないだろうか。ツェランの詩の両義性、双方向性に、ハイデガーがいう真理への見立てを読み取ることは、強引すぎるだろうか。ふたたび『芸術作品の根源』から引用する。

Die Wahrheit ist Un-Wahrheit, insofern zu ihr der Herrkunftsbereich des Noch-nicht (des Un-)Entborgenheit als Wahrheit west zugleich das andere „Un-“, eines zwiefachen Verwehrens. Die Wahrheit west als solche im Gegeneinander von Lichtung und zwiefacher Verbergung. (GW5-48)

おわりに ハイデガーとツェラン 通底する倫理性と政治性

ハイデガーもツェランも、神や理性による意味付けが喪失した近代社会に対し、形而上学的な意味を与えることを拒んだ。深淵を前にして、そして無に対して、「ことば」によって根拠づけすることを拒んだ。

ツェランの詩は、生前から難解だとの誹りを受けてきた。このことは彼自身「子午線」の中で触れている。けれども、現実をことばによって表象することの不可能性を体現するために、奇をてらって難解な詩を書こうとしていたわけでもなければ、余人には近寄りがたい純粹言語空間の世界でのみ、筆舌しがたい体験を表象できないと考えていたわけでもなかった。ところが、アウシュヴィッツ以後の西ドイツでは、ツェランの詩は、グスタフ・ルネ＝ホッケ、フーゴー・フリードリヒをはじめ、研究者によって「秘教的詩人」として、ノヴァーリスと並び評されていた。これに対し、ツェランは繰り返し反撥を示している。西ドイツの文壇は、ナチス以後の「学問の非政治化」のポーズをとっていた。そのアリバイに組み込まれることをツェランは拒否したのだ。

本論の中で言及した dunkel とは、現代詩の「難解さ」という意味でも使われている（フランス語の

obscur も同様の二義性をもつ)。「Es gibt diesseits und jenseits von Esoterik, Hermetik u. ä., eine Dunkelheits des Gedichts.」「noch das „exoterischste“, offenste Gedicht ist dunkel」といった具合に²⁶。現代詩の難解さは、秘教的な難解さではなく、パスカルのいう「暗さ」であるべきなのだ。

また、「闇」「讃歌」に共通するとおり、ツェランの作品は人間の受難 Passion をテーマにしたものが多い。受難劇では、キリストの苦難を演者たちが追体験するみのだ。darstellen しながら sich vorstellen する道行きをツェランの詩が描いているとするならば、先ほどみた詩を「闇」にキリストの Passion と重ねるガーダマーの解釈は的外れではない²⁷。死者、犠牲者をことばによって一瞬間現させる「場」として詩を捉えるツェランと、芸術作品を「開蔵しつつ覆蔵する」としたハイデガーとの距離はそれほど隔たつてはいまい。

ツェランの詩では、詩人すなわち人間の力が信じられることはない。むしろ神を前にした無力が強調される。そして歴史の惨禍を前にうなだれるしかない無力。その意味でも、サルトルのユマニズムのような「人間」であることを積極的な力と見做すことはできなかつただろう。ここで、もう一つのハイデガーとの共通項がみえてくる。歴史に対して、人間が能動的・主体的にふるまえると考える思想への嫌悪感だ。ホロコーストを生んだ近代という科学技術の時代への反撥といえ、ことばが軽い気がする。

人間が神といった超越的存在を「根拠」に生きる目的を捏造しなければならなくなった。この人工的なもの Kunst を実体的なものへと転換する所業に加担することを、無骨にしかし頑に拒みつづけたことに、ユダヤ人詩人ツェランとドイツ人哲学者ハイデガーの倫理性と政治性(後者については1930年代半ば以降、というべきだが)の共通性を認められる。『形而上学とは何か』においてハイデガーは次のように語る。

Die ursprüngliche Angst kann jeden Augenblick im Dasein erwachen. Sie bedarf dazu keiner Weckung durch ein ungewöhönliches Ereignis. Der Tiefe ihres Waltens entspricht das Geringfügige ihrer möglichen Veranlassung. (...) Die Hineingehaltenheit des Daseins in das Nichts auf dem Grunde der verborgenen Angst ist das Übersteigen des Seienden im Ganzen: die Transzendenz. (...) Metaphysik ist das Hinausfragen über das Seiende, um es als ein solches und Ganzen für das Begreifen zurückzuerhalten. / In der Frage nach dem Nichts geschieht ein solches Hinausgehen über das Seiende als Seiendes im Ganzen. Sie ist somit als „metaphysische“ Frage erweisen. (GW9-118f.)

無や深淵からの根拠を模索した二人の思惟は、違う道を進みながら、最終的に立ち至った境地は以通っていた。このことを両者は自覚していたのか否かは、定かではない。芸術作品をことばからなる事物としてではなく、存在の真理が開かれる束の間の「場」と捉えていた詩人ツェランと哲学者ハイデガーを結びつけたのは、「無」を前にして、近代のユマニズムに対する懐疑だった。人間の倨傲から距離を取ろうとする政治性、倫理性がゆえに、ふたりとも「学問の非政治化」「ニヒリズム」も、「政治参加」からも距離をとる立場に至ったのではないだろうか。

²⁶ 拙論「深淵の詩学」参照。また、Über Paul Celan に掲載された評を読めば、おおよそ1960年前後の西ドイツでの、ツェランの受け取られ方をうかがいすることができる。

²⁷ Vgl. Gadamer: Sinn und Sinverhüllung bei Paul Celan, Gadamer S.121.

◆参考文献

1) バッハマン関連、Über Ingeborg Bachmann

内藤道雄『詩的自我のドイツ的系譜』(同学社、1996)

國重裕『ことばの水底へ——「わたし」をめぐるオステイナー』(松籟社、2017)

——— 口頭発表「《深淵》の詩学——バッハマンとツェラン」(日本独文学会春季研究発表会、学習院大学、2019年6月8日)では、バッハマンの学位論文とツェランのハイデガー理解の関連性について報告した。

Bachmann, Ingeborg: *Die kritische Aufnahme der Existenzialphilosophie Martin Heideggers. (Dissertation, 1949)*. Piper Verlag, München, 1985.

Böschstein, Bernhard und Weigel, Sigrid: *Ingeborg Bachmann und Paul Celan. Poetische Korrespondenzen*. Suhrkamp Verlag, Frankfurt a./M. 1997.

Böttiger Helmut: *Wir sagen uns Dunkles. Die Liebesgeschichte zwischen Ingeborg Bachmann und Paul Celan*. Deutsche Verlag-Anstalt, München, 2017.

McVeigh, Joseph: *Ingeborg Bachmanns Wien*. Insel Verlag, Berlin, 2016.

Weigel, Sigrid: *Ingeborg Bachmann*. Paul Zsolnay Verlag, Wien, 1999.

2) ツェラン関連、Über Paul Celan

相原勝『ツェランの詩を読みほどく』(みすず書房、2014)

飛鳥井雅友『「しばしばそれは絶望的な対話なのです」——パウル・ツェラーンにおける対話の概念をめぐる』(京都大学大学院独文研究室『研究報告』第7号、1994)

——— 「神学の拒否と詩学——パウル・ツェラーンにおける神義論の問題」(同、第8号、1995)

國重裕「直説法と命令法の弁証法——パウル・ツェランの詩学とルドルフ・ブルトマンの神学」(希土同人社『希土』第40号、pp. 169-182. 2015)

——— 「《無》の詩学——バッハマン、ハイデガー、ツェランを繋ぐ糸」(同、43号、2018)

篠田浩一郎『閉ざされた時空——ナチ強制収容所の文学』(白水社、1980)

関口裕昭『評伝パウル・ツェラン』(慶應義塾大学出版会、2007)

平野嘉彦『ツェラーンもしくは狂気のフローラ』(未来社、2002)

——— 『土地の名前、どこにもない場所としての』(法政大学出版局、2015)

細見和之『「投壘通信」の詩人たち——《詩の危機》からホロコーストへ』(岩波書店、2018)

André, Robert: *Gespräch von Text zu Text. Celan-Heidegger-Hölderlin*. Felix Meiner Verlag, Hamburg, 2001.

Ariadne. Jahrbuch der Nietzsche-Gesellschaft. (München, 1925)

Bachmann Ingeborg& Celan, Paul: *Herzzeit. Briefwechsel*. Suhrkamp Verlag, Frankfurt a./M. 2008.

Buhr, Gerhard: *Celans Poetik*. Vandenhoeck & Ruprecht, Göttingen, 1976.

Cayrol, Jean: *Im Bereich einer Nacht*. Aus dem Französischen von Paul Celan. Schöffling&Co. Verlag, Frankfurt am Main, 2011.

Fassbind, Bernard: *Poetik des Dialogs. Voraussetzungen dialogischer Poesie bei Paul Celan und Konzepte von Intersubjektivität bei Martin Buber, Martin Heidegger und Emmanuel Levinas*. Wilhelm Fink Verlag,

München, 1995.

Firges, Jean: *Den Archeron durchquert ich. Einführung in die Lyrik Paul Celans*. Stauffenburg Verlag, Tübingen, 1998.

France-Lanord, Hadrien: *Paul Celan et Martin Heidegger. Le sens d'un dialogue*. Fayard, Paris, 2004

Gadamer, Hans-Georg: *Poetica. Ausgewählte Essays*. Insel Verlag, Frankfurt am main, 1977.

Harbusch, Ute: *Gegenübersetzungen. Paul Celans Übertragungen französischer Symbolisten*. Wallstein Verlag, Göttingen, 2005.

Janz, Marlies: *Vom Engagement absoluter Poesie. Zur Lyrik und Ästhetik Paul Celans*. Syndikat, Frankfurt a./M., 1976.

Koehler-Luginbühl, Dorothee: *Poetik im Lichte der Utopie. Paul Celans poetologische Texte*. Verlag Peter Lang, Bern, 1986.

Lemke, Anja: *Konstellation ohne Sterne. Zur poetischen und geschichtlichen Zäsur bei Martin Heidegger und Paul Celan*. Wilhelm Fink Verlag, München, 2002.

Lyon, James K.: *Paul Celan & Martin Heidegger. An Unresolved Conversation, 1951-1970*. The John Hopkins University Press, Baltimore, 2006.

Meinecke, Dietlind (Hrsg.): *Über Paul Celan*. Zweite erweiterte Auflage. Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main, 1973.

Pöggeler, Otto: *Spur des Wortes. Zur Lyrik Paul Celans*. Verlag Karl Alber, Freiburg, 1986.

Schwarz, Peter Paul: *Totengedächtnis und dialogische Polarität in der Lyrik Paul Celans*. Düsseldorf, 1966.

Voswinckel, Klaus: *Paul Celan. Verweigerte Poetisierung der Welt*. Lothar Stieheim Verlag, Heidelberg, 1974.

3) ハイデガー関連、Über Martin Heidegger

大谷静浩『ハイデッガーの思惟と宗教の問い——宗教と言語をめぐる』(晃洋書房、2019)

小野紀明「政治哲学の起源——ハイデガー研究の視角から」(岩波書店、2002)

四日谷敬子『ハイデッガーの思惟と芸術』(世界思想社、1996)

中川萌子『脱底——ハイデガーにおける被投的企投』(昭和堂、2018)

西谷修「不死のワンダーランド」(青土社、1990)

入谷秀一『ハイデガー——ポスト形而上学の時代の時間論』(大阪大学出版局、2008)

Figal, Günter und Rauff, Ulrich (Hrsg.): *Heidegger und die Literatur*. Vittorio Klostermann, Frankfurt am Main, 2012.

Großmann, Andreas: *Heidegger-Lektüren. Über Kunst, Religion und Politik*. Königshausen&Neumann, Würzburg, 2005.

Mehring, Reinhard: *Martin Heidegger und „konservative Revolution“*. Verlag Karl Alber, Freiburg/München, 2018.

Pöggeler, Otto: *Philosophie und Politik bei Heidegger*. Verlag Karl Alber, Freiburg, 1972, 1974.

Tenebrae

Nah sind wir, Herr,
nahe und greifbar.

Gegriffen schon, Herr;
ineinander verkrallt, als wär
der Leib eines jeden von uns
dein Leib, Herr.

Bete, Herr;
bete zu uns,
wir sind nah.

Windschief gingen wir hin,
gingen wir hin, uns bücken
nach Mulde und Maar.

Zur Tränke gingen wir, Herr.

Es war Blut, es war,
was du vergossen, Herr.

Es glänzte.

Es warf uns dein Bild in die Augen, Herr:
Augen und Mund stehen so offen und leer, Herr:
Wir haben getrunken, Herr:
Das Blut und das Bild, das im Blut war, Herr.

Bete, Herr:
Wir sind nah. (GW1-163)

闇

近くにいます わたしたちは 主よ
近くにおいて 掴むことができるほどです。

掴まれています もう 主よ、
たがいにく爪を立てて掴まれています まるで
わたしたち 一人ひとりの肉体が
あなたの肉体であるかのように 主よ

祈りなさい 主よ
祈りなさい わたしたちに
わたしたちは近くにいます

風に身を振り わたしたちは行きました
わたしたちは行きました 窪地や火口の水たまりに
身を屈めるために

家畜の水飲み場に行きました 主よ

血がありました それは
あなたが流したものでした 主よ
それは輝いていました。

それはわたしたちの眼のなかに
あなたの像を投げ入れました 主よ
眼と口が大きく開いてうつろなままです 主よ
わたしたちは飲みました 主よ
その血とその血のなかにあった像を 主よ
祈りなさい 主よ
わたしたちは近くにいます

Psalm

Niemand knetet uns wieder aus Erde und Lehm,
niemand bespricht unseren Staub.
Niemand.

Gelobt seist du, Niemand.
Dir zulieb wollen
wir blühen.
Dir
entgegen.

Ein Nichts
waren wir, sind wir, werden
wir bleiben, blühend:
die Nichts-, die
Niemandrose.

Mit
dem Griffel seelenhell,
dem Staubfaden himmelswüst,
der Krone rot
vom Purpurwort, das wir sangen
über, o über
dem Dorn. (GW1, 225)

讃歌

だれもわたしたちをふたたび土と粘土から捏ねあげてくれはしない。
だれもわたしたちの塵に穢いを吹きかけてくれはしない、
だれも。

讃えよう、だれでもないあなたを!
あなたのために、
わたしたちは花咲こう。
あなたに
逆らうことになっても。

わたしたちはひとつの無
だった。いまも、これからも
永遠にそうだろう、花咲きながら。
無の、
だれでもないものの薔薇として

あかるい魂の雄蕊とともに、
天の荒野の雌蕊、
紫のことばの
紅い花冠とともに。
棘の、ああ、棘のうえで
わたしたちが褒め讃えて歌ったことばの